

Title	発刊のあいさつ
Author(s)	釜洞, 醇太郎
Citation	癌と人. 1973, 1, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24223
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

発刊のあいさつ

理事長 釜 洞 醇 太 郎 *



癌はいつなおるようになるだろうか。これは世界中の誰れしも抱えている願いであり、また不安でもある。それは残念ながらも何年たつたらなおると断言できないからである。では全く希望がないかというところではない。それについて少し述べて見たい。

癌は他の一般の病気と全くちがったところがある。殆んどどの病気は、動物に同じ病気をつくって見ることによって診断、治療から予防までの道が確立されたのである。伝染性の病気は特にそうである。それ以外の病気でも発病原因が単一であることが多い。これに反して癌はその原因が無数である。おまけに、化学物質・放射線、ウイルスとお互いに関係のない原因で同じような癌が作れるものだから始末がわるい。それでこの60年間は癌を作ることに専念したけれど、どうにもならぬ絶望感になやまされていたのである。もちろん治療面では、発癌の根本原因はどうであろうと非常な進歩がなされておりメスのとどく所では治療率は格段に上昇しているのは事実である。しかし根本的治療となると話は別である。

現段階ではどういうことがわかったかというところをたとえれば原子の構造の発見に似ているとおもう。殆んど総ての病気は細胞のレベルまたはそれ以上の組織のレベルでの研究で事が済んだのである。結核しかり腎臓病しかり。ところが癌の場合は細胞の中に位する核の中の問題であることがわかって来た。つまり生命の本

質である遺伝子—これは一定不変であるから人間は人間、猿は猿、さくらはさくらと同じ形を保っているのである。—この遺伝子に狂いを生じたのが癌であるという証拠がぞくぞくとあがって来た。その手がかりを与えたのはウイルスである。ウイルスは丁度中性子のように細胞核に衝撃を与え変ってはならない遺伝子に変化を生ぜしめる。これは恐るべきことである。とにかく今はこの中性子に当るウイルスがどのようにして細胞核を崩壊せしめるか、その後はどうなるかという問題に集中せねばならない。そして純粋な学者の研究から原爆が生れ、水爆が生れたが一方原子力の利用、将来のエネルギー源の探求という好ましい方面に転回しようとしている。癌の問題が同じような方向に展開しはじめたのは当然である。アメリカではニクソンがこれに目をつけて、全米の科学者に1976年までに癌を片付けよと命令した。月世界の探求は純科学的にも、軍事的にも所期の目的を達成したと見切りをつけたのである。これは政治家の姿勢としては立派だと思ふ。科学というものはその簡単なものではないが科学者を鼓舞するという意味では有効な処置というべきであろう。

我が大阪癌研究会は大阪大学を中心とした癌の研究者、基礎、臨床の学者を長年にわたって援助して来た。大阪には優秀な研究者が揃っている。今後ともこれらの学者が育つために当会のバックアップを必要としている。これを支援して下さる多くの評議員、賛助会員の皆様の絶大な御賛同を得て、私共は倍旧の努力を惜しまないことを誓う次第である。そしてその成果をこの「癌と人」に発表して行く所存であります。どうぞよろしく。

* 大阪大学総長